

令和5年度すくすく泉事業 実績報告書

(団体名：NPO 法人 いずみの会)

【事業名称】
「すくすく泉」事業
【事業理念】
<ul style="list-style-type: none">●「保育」、「一時預かり」、「子育てひろば」を一つ屋根の下に、地域の子どもたちが地域の人々に愛されて育つ場をつくります。●樹木に囲まれた自然空間や泉文庫の豊富な絵本等、地域で大切に受け継がれてきた財産を活かして子どもの感性を育み、そこで過ごす子どもにとって、楽しく豊かな原風景となる場をつくります。●地域の中の多世代の交流を大切に、子育てを通してみんなが豊かな時を過ごす場をつくります。●子育ての不安感、負担感、孤立感を軽減し、相談しやすく、様々な子育て情報を得られる場をつくります。
【事業内容】
<p>【子育てひろば事業】</p> <ul style="list-style-type: none">・乳幼児親子の日常的な居場所として、育児不安の支えとして、また、地域とのつながりの入り口として、誰もがホッとできる心地のいい場の提供。・多胎育児、低月齢、特別な配慮が必要な子、転居間もない親子、外国人の親、祖父母育児、など、さまざまな育児のスタイルがあり、それぞれが抱える不安がある。どんな親子にも寛容な場であり、気軽にきてホッとでき、安心して過ごせる場の提供。・手作りや木の温かみのあるおもちゃで遊び、いずみ文庫で多くの絵本に触れ、隣接の公園でのびのび外遊びをする。子どもたちが安全に楽しく過ごせる場の提供。・親同士の自然な出会いや支え合いができるようなはたらきかけをし、孤立子育てからの脱却、共に支えあう子育てを促す。・子育て関連情報がワンストップで手に入る、また、利用者のニーズに合わせて紹介し地域へつなぐ役割。内容によっては専門機関へつなぐ役割をもつ。・子育てに役立つ講座や、子育てを楽しむイベントを、内容や月齢などにより対面またはオンラインで開催。・専門家・専門機関とのネットワークにより子育て関連の知識を得られるプログラムを企画。・地域の人々や他団体との連携によるイベントや講座の開催により、地域との出会いを創出。

【一時預かり事業】

- ・保護者の育児に伴う精神的および身体的負担の軽減のため、理由を問わない一時的な預かり保育を行う。（1～6時間、0歳は～4時間）登録済みメンバーに対し、事情による緊急預かりにも対応。
- ・以下の3点を重要な骨組みとした考えは一貫して変わらない。
 - * 命を守り無事にお返しする。
 - * 安心して保護者を待てるような子どもの心の安定。
 - * 安心して子どもと離れていられるような保護者からの信頼。
- ・外国籍、障害などで利用をためらう方にも、丁寧なコミュニケーションにより安心して相談してもらい、できるだけ利用につながるようにしている。そのためにスタッフの質の向上と情報共有を大切にしている。
- ・保育園、幼稚園などに通っていない乳幼児にも他者と関わりながら育つ機会をつくり、また、その保護者の子育てを支える存在となる。

【小規模保育事業】

- ・常勤保育士を中心に話し合いながら、一人ひとりに合わせた保育を積み重ねる。今年度は発達的に配慮が必要な子ども、保護者への配慮が必要な家庭があり、丁寧な読み取りと対応をしていく。
- ・基本方針と保育目標は変わらない。
保育の基本理念基本方針
 - * 一人ひとりの子どもを愛し、尊重します。
子どもが最善の利益とその権利を尊重され、心身共に健康で、未来を創造する基礎が育つよう、チームワークを活かして保育する。
 - * 乳幼児期を豊かにするために家庭と連携します。
人間性の土台が育つ大事な時期としての認識や子育ての喜びを共有し、乳幼児期を豊かに生きるために保育者と保護者が連携していく。
 - * 地域から生まれ、子どもをまん中に地域が支え合う関係づくりをめざします
地域の自然や様々な物的・人的資源、文化を保育に活かします。また、子育てを通して多世代がつながりを深める拠点となり、地域全体の福祉や家庭支援に寄与していきます

保育目標

- * 自分が好き、みんなが好きなこども
- * 心も体も健やかな子ども
- ・子ども一人ひとりの心と身体の成長発達を保障する。
- ・保護者の気持ちに寄り添ったコミュニケーションを重ねる。また、情報が氾濫する世の中で、私たちが子育てで大事にしている基本的な考えを、折に触れて情報発信する。また運営委員会では、保護者代表が対等に意見を出す機会を通して、よりよい運営をつくる立場でかかわってもらう。
- ・多世代、地域の子育て家庭、近隣の園、小中学校など、地域とのかかわりをひろげる。（昨年よりは拡大）
- ・保育者の資質向上と保育の質を高めるための研修をする。
- ・仕事を分担することで保育運営をスムーズに行えるようにし、働きやすい環境づくりを進める。

【新型コロナウイルス対応】

- ・ 5 類移行に伴い、日常の感染症として、子ども家庭庁の感染症マニュアルをもとにした対応とした。
- ・ 消毒はコロナ前に戻したが、感染状況に応じて迅速に強化した。
- ・ 24 時間換気システム、窓開け、空気清浄機は継続使用。
- ・ 一時預かりの送り迎えは、入室させず玄関で受け渡しを継続したが、玄関が混雑したときなど、状況によって中に入ってもらった対応をした。
- ・ 玄関に検温器・消毒液を設置し、出入りの際、利用者が自由に使用できるようにした。

【事業効果・波及効果】

【子育てひろば事業】

- ・ 今年度は「コロナ後の子育て」についてコロナ以前の子育てを知らない親子を意識しながら、利用者の感覚、生活パターン、現在の困りごとなどに丁寧に寄り添ってきた。
- ・ 親子ひろばと一時預かりの利用者を対象に行ったアンケートによると、「スタッフがいい」という内容が大半を占め、実際にスタッフ全員で丁寧に話し合いと振り返りを重ねてきた結果であると嬉しく感じた。また、自由記述欄にも拘わらずたくさん書き込んでくれた利用者が多く、「すくすく泉」に対する思いの大きさが見えた。

「はじめてのひろば」（月 1 回）

はじめていずみのひろばを利用する妊婦～12 か月が対象。予約制。当施設の利用の仕方だけでなく、市内の他のひろばの情報も提供。「子育てひろば」を活用するメリットを伝えた。参加者は多少減ったが、これは市内各所でこのようなインセンティブ事業が活発になった効果だと思う。これをきっかけに日常の利用につながったり、参加者同士で他のひろばに行ってみたりというケースがあった。

「Tomony」「TomonyDay」（各月 1 回）

- ・ 父親も参加しやすい土曜日に、父子または家族で参加できるプログラムを開催。Tomony は「共に」の意味で、夫婦で共に、家族で共に、子育て仲間と共に、地域と共に、など、子どもを育てるのは母親一人の役割でもないし、また、母親だけの楽しみでもない、というコンセプト。
- ・ 「Tomony」の内容は毎月違う様々な講座やイベント。
助産師による「パパのベビーマッサージ講座」、保育士による「おんぶ講座」、鍼灸師による「夫婦で肩もみ名人になろう」、子育てアドバイザーによる「子育て座談会」など、育児の知識アップや、父親の育児参加推進、夫婦で共に子育てをする意識の向上、参加者同士知り合うきっかけなど、どれも予想以上の父親参加率だった。妻の本音や夫の本音なども出て、参加してよかったという声があった。
- ・ 運動会・コンサートなど、家族で参加し大いに盛り上がった。これらのファミリー参加企画は、父親のひろば利用のきっかけになることが多い。
- ・ 「TomonyDay」は、その日たまたまひろばで出会った親子が自己紹介をし合い、手遊びや絵本などをテーマにみんなで遊ぶ日。話をすることで顔なじみになり、安心して一緒に遊ばせたり、みんなで見守るようになる。後半には毎回防災についてのワンポイントトークタイムを設け、若い子育て世代に地域防災の意識を持ってもらえるようにしている。
- ・ 「Tomony」「TomonyDay」どちらに参加してもスタンプがもらえ、3 つごとにオリジナルのファミリーフォトフレームをプレゼントし、家族での繰り返しの参加を促したことで顔なじみも増えた。

「すくすくタイム」(週2回)

- ・発達に不安があり育てにくさを感じている親子も一緒に過ごせるインクルーシブなひろばを目指し、子どもの発達に対する知識と理解を深める取り組みを行った。このプログラムも定着してきたようで、楽しみに来てくれる親子もいる。
- ・火曜日は「触感」「バランス感覚」「力加減」「ボディーイメージ」などの感覚刺激をテーマにした遊びの紹介。片栗粉スライム、揺らし遊び、バランスボード、風船運びなどなど…。保護者は、このような遊びが子どもの発達にどのように関係しているのかを知る機会となる。
- ・木曜日はわらべ歌などと発達刺激の話を結びつけて解説。実際に親子で遊びながら、最近の子どもの様子や子育ての悩み、心配事などを話す時間。
- ・年齢の違う子が同じ遊びをすることで、親が発達の段階を確認する機会にもなった。
- ・子どもの遊びと発達の関係を知ること、子どもは意味のあることをしているのだと気づいた、家での遊びにも取り入れたい、という声があった。

「離乳食講座」「保活のはなし」

- ・離乳食講座(初期)、保活の話、は、今年度も「境おやこひろば」とのコラボでのオンライン開催にした。コラボにより広範囲の親子に情報を届けることができた。
離乳食講座の「手づかみ食べ」に関しては、この頃は発達の差も出て、悩みが個々になってくるため、より実践的なアドバイスをするために対面で開催した。実際に食べてみたり、指摘されたことを試してみることで、今までの講座で聞いたことや本に書いてあることがやっと腑に落ちた、というコメントがあった。

「ひろばで食べよう」

7月から室内のカフェコーナーでは、大人も子どもも常時飲食可能とした。お昼に帰宅しなくても遊べるようになった。同じくらい子どもたちが食べている様子や、食べている物を見ることは、とても参考になる。また、助けてくれる人やアドバイスをくれる人、同じ悩みを持つ人が近くにいることで、不安が解消されたりイライラすることも減る。

引き続きレジャーシートの貸し出しも行い、家族単位でデッキや公園で食べることもできる。遊びの間にちょっとしたおやつタイムを、デッキで過ごす気分転換も好評。

「利用者を活かす」

一方的にサービスをするのではなく、利用者も一緒に心地よい場づくりを意識してきたが、今年度は、一時預かりを利用しながら資格を取った方が「オンラインヨガ」を毎月継続して行ってくれた。

日常的にも、スタッフの手が回らないところに利用者がさっと動いてくれたり、初めて来所した親子と積極的におしゃべりしてくれたりする場面も増えている。

「こらぼのコミセン親子ひろば」

月に2回、中町集会所で「こらぼのコミセン親子ひろば」を開催した。予約制ではなくなったが、利用者数はなかなか増えなかった。親子ひろばで誘ったり、おたよりで紹介したりして、少しずつ増えているのか？ランチタイムも再開したが、今のところ参加者は0。また、久しくできていなかった講師を招いての企画を再開させた。

【一時預かり事業】

- ・ コロナ禍で同時間帯に3人預かりに減らしていたが、今年度は4人にした。
- ・ ニーズは増えている。年末の予約は取りにくいのは毎年のことだが、キャンセル待ちを受け始めたので、何度も確認の電話をしなくて済むことになり、利用者からは好評。
- ・ 定期的に利用するヘビーユーザーの数が増えている。
- ・ 事前に面接や聴き取りをして登録をし、当日にも子どもの情報を聴き取り、安心安全な預りを目指してきた。ひろばの親子の中で慣れない子どもを預かることから、その子、その子に合わせた預かりを丁寧に行った。
- ・ 担当スタッフが交代した時や、しばらく期間が空いての預かりもスムーズに行えるよう、情報を共有し、記録を残している。
- ・ 配慮の必要な子どもを預かることも増え、職員はミーティングやノートを活用しながら都度情報交換をした。
- ・ 外国出身の親の利用に関しても、丁寧にコミュニケーションを取って預かりを行った。
- ・ 10月から一般型一時預かり事業として、子ども育成課の管轄となりひろば事業から独立した。保育士の配置基準が変わったため、シフト組が難しくなったが、10年間で、かなりの人数のスタッフが保育士資格を取得、また、新規で有資格者を採用してきたので、対応できている。

【小規模保育事業】

- ・ 小規模保育事業A型に移行して3年目。非常勤職員が全員保育士資格をとり。常勤保育士5名体制のシフトで保育が安定した。また、給食スタッフの雇用により、給食シフトが安定した。
一方、定員割れで年度がスタートし、1歳児1名5月から、0歳児1名7月からの入園、さらに、年度途中の1月末で1歳児1名退園となり、運営費が大幅に削減された年度となった。
- ・ **保育観と情報の共有**
保育観の共有を大事にしてきた。毎日10分ほどの短時間のミーティングを重ねたり、アドバイザーの助言をいただきながら、チームとしてどのように子どもや保護者に対応するかなどを考える体制をつくってこれた。また、日々の中で感じたことを出し合い、常勤だけでなく非常勤も思っていることを発言しやすい雰囲気になってきた。
- ・ 昨年度の保育を活かして、1クラス10人の異年齢保育の中で一人ひとりのニーズに合ったかわりを深められた。
 - * 愛着関係は家庭により様々で、発達に配慮の必要な子もいた中で、丁寧な読み取りと手立てをしてきた。どの子もありのままの自分を安心して出せるようになっている。また、甘えたい気持ちや依存したい気持ちを1対1で十分受け止めることができるようチームワークを意識して保育してきた。気持ちが満たされることが、成長も含め、全ての土台になることを再確認した。
 - * それぞれの発達やニーズに合わせた環境をつくり、散歩の仕方も工夫してきた。それにより一人ひとりがじっくりと遊べるようになってきている。
 - * 友だちとやり取りをする中で生まれる心の葛藤も十分に経験することで、人と関わる力が育っている。また、自分で考えたり、選択したり、自分の気持ちとの折り合いをつける力も育っている。
 - * 児童票の発達記録を改良した。

・家庭との連携について

- * 常勤保育士が担任としていつもいることで、送り迎えのときの会話や連絡ノートを通して、日々の姿とともに成長の過程を共有することが信頼につながっている。
- * 保育参観と面談は、昨年度に引き続き、保護者の人数を1人に絞り、様子に合わせて参観や参加をした。普段とあまり変わらない自然な日常の中で、我が子の友達とも関わってもらったことで、保護者からは様々な気付きが寄せられた。
- * 園日よりでは写真と共に子どもの成長や園が大事にしていることを伝え、保護者にも好評だった。また、ICTシステムを使い日々の様子を写真入りで配信したことも好評だった。
- * 保護者アンケートでは、子どものやりたい気持ちを尊重してくれるところ、子どもに考えさせてくれるところ、園に行くのを楽しみにしているところなどについてよかったという記述が多かった。

・研修について

- * 昨年度から引き続き、子どもを信じて見守り、読み取ってかかわることを課題にしている。今年度のテーマを『じっくり観察するとどんな気付きがある?』とし、各自が自分自身の実践を1年間通してシートにまとめた。
- * 河邊貴子先生を講師に招き “『遊び』の意義や価値について保護者に伝えるには” をテーマに、事例を持ち寄りグループワークで具体的に学ぶ。(まちの保育園吉祥寺との合同研修)
- * キャリアアップ研修の受講(障害児保育、マネジメント、保護者支援)や市役所の全体研修、東地域会議での研修、小規模保育室研修、外部研修に参加し、それぞれの学びを共有した。

・運営委員会について

Zoom 会議で行うことで保護者の負担が軽くなった。プロポーザル、ICT 化への取り組み、定員割れの現状、保護者アンケートの意見などについて共有したり、対策をお話したりした。それぞれの立場からの意見が出しやすい会議になっている。

- * 今年度は労災や、子どもの通院が今のところない。今後も、子どもが自らの力を知りながら挑戦できる環境を保障するために、一人ひとりの発達に伴う危険要因やヒヤリハットを職員間で共有し、予測も立てながら、環境改善や職員の配置などに配慮し、安全な保育につなげていきたい。

・仕事の見える化、効率化、ICT化

- * 今年度から ICT システムを導入し、登降園入力や延長保育時間と料金の管理、給食写真の配信、タイムリーなお知らせ、写真販売などに活用している。仕事の見える化を図り、皆がお互いの仕事を理解して動けるような取り組みを進めた。事務等が効率的になった。

・近隣の園、小中学校との連携

- * まちの保育園吉祥寺とは、芋ほりや節分、観劇会への参加、すくすく泉公園での人形劇への招待、合同研修などで連携した。
- * 武蔵野赤十字保育園にはお店屋さんごっこに招待してもらい、たくさんの遊びに触れて楽しむことができた。
- * 井之頭小学校の1年生の生活課「あきまつり」に客として参加し、楽しく遊ばせてもらった。
- * すくすく泉公園では、遊びに来る他園と一緒に過ごす機会や、小学生や近隣の方との交流がある。
- * 新年度開設のビーマスクールと、まちの保育園吉祥寺、精華第一保育園の4園で顔合わせを行い、主に公園の使い方などを確認し合った。

【達成目標に対する評価・反省】

・3事業の連携で質を高める

* ひろばプログラムの講師を「いずみのおうち」の保育士が行い、「おんぶ講座」「保育園生活座談会」を行った。また給食で提供しているスープが味わえるイベント「はじめましてのピクニック」「一本桜のお花見会（3月予定）」を行い、保育園と一体の施設ならではの内容が好評だった。

* 保育の親子が、土曜日にひろばを利用する姿も見られる。

* 公園では、保育、ひろば、一時預かりの子と一緒に遊ぶ姿が見られ、ひろばの親子と保育の保育士との交流も生まれている。

* 公園を利用した人形劇、クリスマス会などを、保育室とひろばが協力し合って実現させた。保育の子どもたちも、ひろば利用の親子も一緒に楽しめた。

* ひろばのベビーマッサージ、はじめてのひろばなどに参加した親子に対し、『保育所体験・赤ちゃん触れ合い体験』を紹介し、多くの参加者が保育所体験をした。

* 避難訓練・防犯訓練・災害時事業継続計画の策定など、共に進めた。

・他施設、他機関との連携を深めていく

* 毎月1度の拠点会議に加え、Logoチャットの活用により、子育て支援施設8拠点の連絡がリアルタイムとなった。親子が市内のひろばを巡る「シールラリー」などを行うことで、施設間のやり取りが増え、協力体制が進んだと感じる。災害時などでも活用するため、普段からのやり取りで慣れしておくのは有効だと思う。

* いずみのひろばのプログラムに保健師や助産師を招き、利用者となつなぐ試みを継続した。

* 井の頭アートマーケットとのつながりから、コンサート企画を実現し、多くの親子が楽しんだ。

・子育て世代同士の出会いを自然に促すためのサポートプログラムを実施する

月2回のファミリー向けプログラムTomony、TomonyDayにより、父親を含めて出会う機会を多く作ったことにより、以前よりファミリー単位で知り合いになっている利用者が増えた。それにより、父親だけの日常利用も自然な雰囲気を受け入れられているように見える。また、同月齢くらいの子どもたちが、他の家族からも成長を喜ばれ、一緒に過ごす光景も増えた。

・多様な子育てに対応できる施設にする

療育に通う子どもたちの利用は定着している。周囲の理解を促すためのスタッフの動きも自然になってきた。また、保護者達がスタッフと協力体制で対応している場面も見られる。スタッフも全てを助けるというより、親と一緒に見守る体制をとることで、この場は利用者も含めみんなでつくることを伝えようとしている。スタッフの受け入れ方や言葉かけで利用者が気づき（子どものいいところや、大人が待つ姿勢など）を得る機会にもなる場合もある。さらに、我が子の発達に少し不安のある親の相談に、当事者として乗ってくれることもある。

外国出身の親子のひろば利用や一時預かりも増えている。特に一時預かりは親子ともに言葉の壁があり、詳細な報告が難しい場面もあった。ミーティングなどで話し合いを設け、対応を検討した。

・切れ目のない支援の一翼を担う

低月齢の利用が「はじめてのひろば」から始まることが多い。その後、ベビーマッサージや離乳食講座などに繋がっていき、日常的なひろばの利用者となる。助産師の産後ケアからの紹介で利用された方、保健師の紹介という例もある。

・ **地域とのつながりについて**

- * 今年も「昔遊びの日」を行った。地域のお年寄りにお手玉やメンコなどを、学童に通う小学生にけん玉を教えてもらった。異年齢で楽しく交流した。恒例のみんなで花いちもんめは盛り上がった。参加は4歳～8歳くらいが多く、保育の卒園児も多く参加した。中学生、父親、地域の方の参加もあった。
- * ひろばでは月に1回の読み聞かせの会に地域のボランティアさんが継続して来ていただいている。
- * 公園で地域のボランティアさんと水やりや花植えをした。
- * 公園では、他園の子どもたちや先生、また井之頭小学校の子どもたちとの日常的な交流がある。
- * 親子の育児の不安や負担を軽減するため、ひろばの0歳児親子に15分ほどの保育園ツアーを実施した。園児が食べているところや生活の様子を見ることができて好評だった。
- * 公園では、ひろばの親子や保育の子どもたちもみんなで一緒に、クリスマス会などを楽しんだ。武蔵野赤十字保育園の元保育士が立ち上げた人形劇団『はじめの一步』の人形劇も公園で楽しんだ。
- * 中学生の職場体験を受け入れ、保育、ひろば両方の体験をしてもらった。
- * 小学生、中学生が、保育園体験として保育の子どもたちと遊ぶ経験をした。
- * 井之頭小学校の6年生の授業に出向いて、保育士という職業について話をした。
- * 地域の方が孫の利用のため、自分の息子夫婦にここを勧めてくれた例があった。
- * 地域の90代の方（娘さんが泉幼稚園卒園）が、絵本や折り紙、手作りのおもちゃを持って何度も来てくれた。

・ **運営体制の安定化と次世代へのつなぎ**

今年度、非常勤スタッフ2名が保育士資格を取得したことで保育室スタッフは全員保育士となった。一時預かりの非常勤スタッフ1名が保育士資格を取得した。
また、一時預かりに元利用者が2名、スタッフとして加わった。

・ **施設改善**

- * 保育室入り口、シャワー室前の棚を設置した。
- * 外用の洗面台を設置した。
- * 掲示物やおもちゃの量など室内環境を見直し改善中。

【令和6年度以降の見通し】

【子育てひろば】

- ・ 一時預かりとともに「多様な子育てを支える」、「みんなで育てる」をテーマにする。
- ・ コロナ以降の多様な働き方、また子育てに関する感覚の違いなどに留意しながら、子育て世代に心よりどころとされるような場にしていける。さらに、その親世代や地域の人々にも、子育ての拠点として認識され、見守ってもらえるような施設にしていきたい。
- ・ ここで出会い、ここから地域へ、やがて支え手としてここへ戻ってくる、そんなサイクルが、事業を始めて10年、やっと見えてきたと思う。将来を見据えて事業の継続を考えたい。

- ・ひろばのプログラムについては、毎年1月ごろに1年間の大きな計画を立てるのだが、実際はその時の利用者の様子やニーズによって臨機応変にアレンジしていく。そのようにニーズに敏感に、小回りのきくことが、この施設の良さだと思っているので、その都度話し合い、精査しながら進めていく。
- ・引き続き、子どもの発達や遊びについての学びを継続する。
- ・若い世代の防災意識を高める取り組みを継続する。
- ・他の子育て支援拠点との連携、専門機関との連携、地域活動との連携など、周囲との連携を深める。

【一時預かり】

- ・最初から利用を断ることなく、保護者と話し合いながら、できるだけ預かるようにしてきたが、昨今、多様な働き方、親のメンタル面、外国人、特別な支援を必要とする子ども、など、様々な対応が増え、難しくなっているのを感じている。それらに対応する専門知識などの学びはもちろんだが、スタッフひとりで請け負うのではなく、みんなで話し合いを重ねて対応することに重点を置いていく。
- ・有資格スタッフを1日通して配置するため、資格所得、有資格者採用、シフト組みに力を入れる。
- ・保育園、幼稚園等に属さない乳幼児も、定期利用枠をつくることにより、多くの人に可愛がられて育つ経験ができ、保護者にとっては、共に子どもの育ちを喜び合い、相談援助を含む寄り添いをしていく。新しい事業のため、周知、書類整備、具体的な対応、配慮など丁寧に取り組んでいく。（『多様な他者との関わりの機会の創出事業』）

【小規模保育事業】

- ・定員を10名から11名に増やすため、受け入れ態勢を整えていく。また、新入園児獲得のために、すくすく泉の良さについて再認識し、外部へわかりやすくアピールしていく。
- ・ICTの導入により、仕事の効率化と保護者との情報共有などを更に進めたい。
- ・子ども一人ひとりに合わせた保育をしていくために、スタッフが、子どもの姿やかかわり方について、色々な感じ方や考え方を出し合い検討し合える場を今後もつくっていききたい。非常勤スタッフや給食スタッフとも情報共有していきたい。
- ・保護者との信頼関係で結びながら多方面から支援する。
- ・保護者同士の交流ができる場を更に意識してつくっていく。
- ・アドバイザーの毎月の視察や会議、テーマをもった園内研修、またオンラインを活用してキャリアアップの研修や市主催の全体研修など外部に自ら学びに行く機会を作っていく。
- ・中高生対象の職場体験、ひろば親子を対象にした『保育所体験・赤ちゃん体験』などは、さらに内容の充実をはかりたい。
- ・小学生とは日常的に公園で場を共有しているが、小学校とも連携し、乳幼児と小学生の交流の機会をつくりたい。
- ・近隣の園とは、合同研修会などを通して、子育てを共に学び合う関係づくりをしたい。特に近所に新しい園も開設することから、すくすく泉公園での遊びの連携、充実をはかりたい。